

cross references:

協働のためのケーススタディ

self-re-location

1つの景色を、2つの場所で



cross references :

協働のためのケーススタディ

「cross references：協働のためのケーススタディ」展によせて

本企画について

大森 悟

女子美術大学が、近隣の美術系大学と共に相模原市のアートラボはしもとと協定を結んで6年目となります。この数年間にアートの多様性もさらに増し、新たな試みとして、地域における芸術活動も活発になり、それぞれのコミュニティが関係性を結びながら進化と定着を続けています。「cross references：協働のためのケーススタディ」展は、アートに関わる者同士の、作品を介したコミュニケーションと、その結果として生み出される関係性を持った展示を鑑賞していただくことで、一見複雑で難解に見える表現行為の内容と広がりが、個人から他者へと、つまり社会へと展開されていく様子を知っていただけるような企画内容になっています。また、本展の特徴の一つは、参加したアーティストがお互いの作品について考察することで、制作の技法や技術への理解はもちろん、制作のその先に、社会性を獲得する過程で生じる、さまざまな葛藤と欲望や不安が露わになり、人間の内面性も垣間みせることにあります。

私たち人間は、何か新たなことを試みるときに、少なからず対社会を意識し、そこに価値や問題を投げかけます。

アーティストも同様に、表現行為を行う際には、社会を意識しています。その行為は、複雑怪奇で流動的な社会という、広大な宇宙空間のような未知なる世界に、自らの思想と肉体を放り出すようなものかも知れません。その結果、新たな成果が社会に認められ、銀河座標に点を刻むように、個人の存在を世間が知ることもあります。しかし一方で、社会という広大な世界には闇に浮遊し漂う、見えない個人と、その思想と肉体が存在していることにも気づきます。この見えない未知なる存在は、果たして私たちにとって無価値で無関係で、無視できてしまうようなものなのでしょうか。私たちは、決してそうは思わないはずです。何故ならば、多くの者が、私にとっての未知なるものは、あなたにとってのそれであるということを、自身も広大な世界の中では、未知なる側に位置していることを知っています。またその彼方には優れた成果があり、何ものにも依存しない解放と孤独などありえないということを、生そのものがそこにあることにおいて気づいているからなのではないでしょうか。

さらにもう一つ本展の特徴となっているのが、これまで接点の少なかったアーティスト同士が、さまざまな方法でお互いの存在を認識し、その過程における結果として、介在する作品が大きな役割を担っているということです。今回的方法は、アーティスト自身にとっても改めて新たな気づきを得ることがあるはずです。それは、自ら制作した作品が、いつの間にか自身の手を離れ、既に社会と関係性を持ち始めているということ、つまりは作品が自律しているということを知ることに他なりません。今、私たちに必要なのは、現代的な視点からこれらの見えなかったもの、分かりづらかったもの、明確な立ち位置を持たないように見えていたものを再確認することで、眠っていたかのような膨大な人類の財産を見つけ出していくことではないでしょうか。そしてその再発見の作業は、多くの豊かさを私たちに提供してくれるはずです。また、アーティストにとっても同様に自身の生み出した作品との距離や関係をよりよく知ることで、改めて表現することの喜びを手に入れることができるでしょう。

そのためには、本展を通して展開された「参照」するというキーワードや、新たな知識と方法を「協働」して獲得していくことが重要であり、その一步を踏み出す勇気が必要とされます。本展が、未だ見ぬ世界に光をそそぎ、多くの人々の存在と暮らしを知るきっかけとなり、またそこに育まれたアートに対する理解を深めていただくことへと繋がっていくことを願っています。

沼下桂子

この展覧会は、女子美術大学の教員や学芸員・関係者、並びにアートラボはしもとからなるプロジェクトチームによって企画された展覧会です。展覧会タイトルの「[cross references]」は、パソコンの文書作成ソフトが、文書内のある箇所に別の箇所への参照先を設定し、その参照先にある文言を自動的に引用して表示させる機能を示す用語に由来しています。本企画では、学生と学生、学生と教員からなる作家が、企画者によって任意に決められたペアを組んで、ポートフォリオ（作品ファイル）を交換しながらお互いの作品について考え、どのような関係性を持たせるのか、どのように展示するかなど、試行錯誤しながら構成していった作品を展示します。通常、作家は、展覧会のテーマを通してその企画者と向き合うことになります。けれども、出品作家同士は「個人」の出会いでしかも、お互いの作品について意識することはそう多くありません。この展覧会では、ペアとなった作家同士が、それぞれ相手の作品やその背景についてよくリサーチし、それを展示に反映させていくというプロセスを経ているため、作家・作品についての相互理解が深まることが期待されます。各ペアはお互いを「参照」し合いながら個々の展示を考えますが、同じようにそのペアが他のペアを「参照」するなど、相互に関係し合う展開をみせながら、全体の関係性も深まっていきます。また、企画者は、29名14組*のペアを「参照」しながら、展覧会全体の構成を考えることになります。

本企画がそうしたプロセスを経るのは、本展の会場であるアートラボはしもとの諸活動がミッションとする「協働」のあり方を参照し、企画されたこととも関係しています。アートラボはしもとは、本展主催者である女子美術大学、並びに近隣の美術系大学（桜美林大学、多摩美術大学、東京造形大学）などと連携を取りながら、さまざまな事業を展開しています。企画者は、そうした「協働」のあり方を、本企画のひとつの参照点とし、今年度この企画を機に新たに始まった、女子美術大学とアートラボはしもととの両者の関係性を通して、他者と関わることによって実現される「協働のためのケーススタディ」を実践しようとするものです。展覧会を通して「相互参照」される関係を、自身との接点や違いとして経験するとき、本展はあるひとつのケーススタディを提示する場となるでしょう。

*「記憶のはがし方プロジェクト」は、阿部大介と鷹野健、2人によるユニットを1作家としてカウントしています。

開催概要

女子美術大学 × アートラボはしもと連携プロジェクト

cross references : 協働のためのケーススタディ

2017年11月17日(金) - 26日(日)

10:00-17:00 ※水曜休館 入場無料

会場 :

アートラボはしもと

〒252-0146 神奈川県相模原市緑区大山町1-43

関連イベント :

■ 参加作家によるギャラリー・トーク

参加作家が展示室で自身の作品について語ります。

日時 : 2017年11月18日(土)、26日(日) 14:00-16:00

■ トーク・イベント「関わりながらつくること」

参加作家の「記憶のはがし方プロジェクト」(阿部大介 / 鷹野健) と、

加藤慶(アートラボはしもと学芸員)が「協働することの有効性」について話します。

日時 : 2017年11月18日(土) 17:00-18:30

※ イベント終了後、会場内でオープニングレセプション。

主催 :

女子美術大学

共催 :

アートラボはしもと(相模原市)

後援 :

アートラボはしもと事業推進協議会

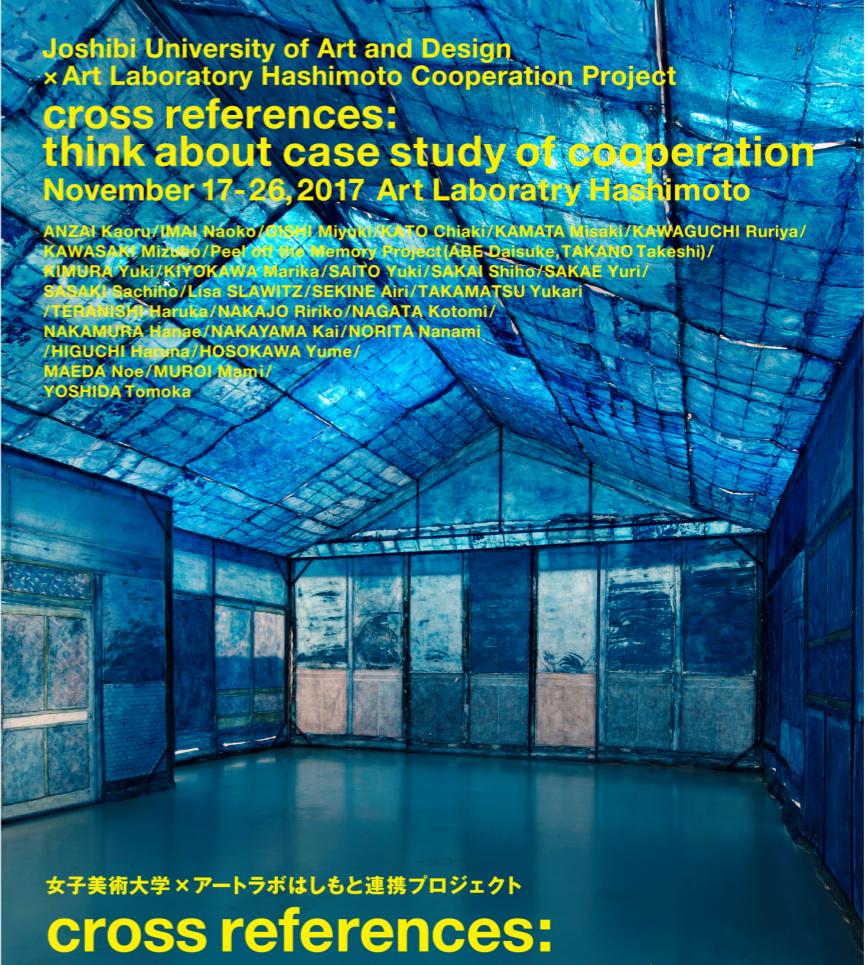
(女子美術大学・桜美林大学・多摩美術大学・東京造形大学・相模原市)

**Joshibi University of Art and Design
x Art Laboratory Hashimoto Cooperation Project**

**cross references:
think about case study of cooperation**

November 17-26, 2017 Art Laboratory Hashimoto

ANZAI Kaoru/IMAI Naoko/OISHI Miyuki/KATO Chiaki/KAMATA Misaki/KAWAGUCHI Ruriya/
KAWASAKI Mizuno/Peel off the Memory Project(ABE Daisuke,TAKANO Takeshi)/
KIMURA Yuki/KIYOKAWA Marika/SAITO Yuki/SAKAI Shiro/SAKAE Yuri/
SASAKI Sachiko/Lisa SLAWITZ/SEKINE Airi/TAKAMATSU Yukari/
TERANISHI Haruka/NAKAJO Ririko/NAGATA Kotomi/
NAKAMURA Hanae/NAKAYAMA Kai/NORITA Nanami/
HIGUCHI Haruna/HOSOKAWA Yume/
MAEDA Noe/MUROI Mami/
YOSHIDA Tomoka



女子美術大学 × アートラボはしもと連携プロジェクト

**cross references:
協働のためのケーススタディ**

2017年11月17日[金] - 26日[日] 会場:アートラボはしもと 10:00-17:00 *水曜休館 入場無料

安斎薫 / 今井直子 / 大石深雪 / 加藤千昌 / 鎌田海咲 / 川口瑠利弥 / 川崎理穂 / 記憶のはがし方プロジェクト(阿部大介・鷹野健) /
木村優希 / 清川茉莉佳 / 清藤優希 / 酒井繁帆 / 栄悠里 / 佐々木幸穂 / リサ・スラヴィツ / 関根安依莉 / 高松由佳利 / 寺西進 /
中条瑛々子 / 永田琴巳 / 中村花絵 / 中山闇 / 乗田菜々美 / 植口遥菜 / 織川友萌 / 前田乃映 / 室井麻未 / 吉田朋花

アートラボはしもと: 〒252-0146 相模原市緑区大山町1-43 (京王相模原線・JR横浜線・相模線各本駅南口より徒歩約12分)
問い合わせ:女子美術大学 洋画春秋研究室(担当 中山) Tel: 042-778-6111(女子美術大学 代表) E-mail: yo-sai@venus.joshibi.jp URL: <http://mixed-color.com>
主催:女子美術大学 共催:アートラボはしもと事業推進協議会(女子美術大学・桜美林大学・多摩美術大学・東京造形大学・相模原市)
アートラボはしもと
Art Laboratory Hashimoto

広報物・会場グラフィックデザイン:石井一十三



プランニング 企画会議から

「cross references: 協働のためのケーススタディ」は、タイトルが示すように、「協働」というあり方にフォーカスすることを目的に考えられた展覧会です。その背景は、会場となったアートラボはしもとの活動が、周辺にある美術大学や地域と連携した活動を行い、あるいは卒業後に作品制作を続けるアーティストのスタジオを数多く紹介する「SUPER OPEN STUDIO」で活動のハブになるなど、さまざまな「協働」をミッションとしてきた場であることを踏まえ企画が考えられました。協働とは自分一人ではなし得ず、常に第三者と関わることを前提としています。そのため企画自体も誰かとペアを組んで取り組む仕組みが考えられ、企画ミーティングの当初から「借り物競争」や「二人三脚」のような方法で、プロジェクトに取り組もうという発想がありました。

「cross-reference」という、文書作成ソフトなどが本文と参照先としての注釈などを自動的に相互参照を自動化する機能を指す言葉をタイトルにしました。タイトルは、会場見学の夜に、一緒に企画を考えた岸本紗和子さん、中山開さんとともに「タイトルが決まらない」と言いながら夜ご飯を食べお酒も少し入った時、中山さんから出た「参照」というキーワードをもとにその場で3人でスマートフォンで言葉を調べながら出てきた言葉で、その場でサブタイトルを含めた展覧会タイトルがフィックスしたこと記憶しています。

(沼下桂子)

この企画には学内美術館の学芸員という立場で加わることになったが、最初は具体的にどのような役割をするべきなのか、自分にどんなことが可能なのかわからないところからスタートだった。初期の頃の打合せで、企画側の意識のなかで「作品」と「展覧会」が離れた位置に置かれているような、作品を見る側の視点があまり意識されていない印象を持ったことを覚えている。これは、自分にとっては新鮮な気づきだった。また、確かに展覧会を作ることは、作家同士、作家とキュレーター、また作家と鑑賞者など「作品」を挟んだ様々な人との関わりそのものだと言えるかもしれない。今回の「協働」というテーマをふまながら、学芸員として改めてそれを考えてみたいと思った。

(岸本紗和子)

協働というフレーズが、確か最初期の企画会議に上がっており、そのまま展覧会の基軸に据えられていった。近年、既視感あるワードかつ、そもそもいかなる展覧会、企画、仕事等であろうと必ず起きている事柄をあえて言明するだけのものが、出力までの経過を見せづらい展覧会という形式において見えている、見せられているのかについて、また、今回とくに想定していたのだが、参加者のある程度が抱いていたであろう作品主導の思いと企画の間に起こるだろう齟齬とに終始注意をはらいながら関わるよう心がけていた。

とはいえ、協働というフレーズから発生した、ペアを組みそれを基準に展示が組まれていくシステムは、スキルの共有などに教育的な意味でも非常に有効な効果が見えていたように思う。同じ空間を共有し作業するというともすれば普通のことであるプロセスの意味を次回の企画に引き続き強く考えさせされることになっていく。

(中山 開)

ひとつの「協働」のあり方の例として、近年活動している鷹野くんとのユニットでこの企画に参加させてもらうことになった。作家によって多少の差こそあれ、他者との繋がりの中で作品の着地点は変化するだろう。今回の企画に参加した人は、普段は個人で作品を作っている人が殆どだ。ペアとなる人との交流を通じて、様々な側面からお互いの差異または共通点を探ってみる。そこで発見した何かを介在させ、いつもと違う所に着地してみる。そんな企画になればと思った。

(阿部大介)

説明会・アートラボはしもと見学会・ペア組み

ペアの組み分けは、私と岸本さんを中心に、ポートフォリオの情報をもとに選んだペアを基礎にして、アートラボはしもと見学会の午前中にフィックスさせました。作家には秘密にしてまつたランダムに機械的なくじ引きなどで選ぶこともできたかもしれません、今回の企画では「枠組みを企画・設計する人」という役割があったので、全員のポートフォリオを見て判断する、人の意図が介在している部分を引き受けるかたちをとりました。

今回この企画に関わる上で、卒業生の一人として部外者であるという立ち位置からどのように関わることができるかを考えていました。大学には在職していないので、普段の人間関係やどんな人柄なのか、どんな作品を作っているのかもほとんど知らない状態で、あくまでもポートフォリオから読み取れる情報を頼るしかありません。読み取れる情報は、作品のみならずポートフォリオのデザイン、プロフィール欄に描かれたメッセージ等、全てに及びました。学部生は特に、ポートフォリオづくりがまだ不慣れで不用意な情報が組み込まれている場合もありましたが、今回は作品を見るだけでなくその部分も含めることで、各自が持っている関心、描かれている作品の色、コンセプトなどを探し判断材料としました。

(沼下桂子)



設営場所の交渉／ペアの制作・調整のドキュメント*

*ペアの制作、調整過程の記録を「ドキュメント」として展示することがプログラムに含まれていました。

わたしはラボ見学会に参加できなかった為、後日ペアの子に会場の地図と写真を見せてもらい場所決めを行った。アートラボはしもとは、建物の構造が特殊なこともあります、地図と写真では良くわからず見学会に参加できなかったことを後悔することになった。

場所決めにあたり、私たちはとにかく広いスペースを希望した。今回二人で決定したテーマが「夢」であり、広がりのある作品を制作することが決まっていたからだ。事前に簡単な試作を作り探すも行っていた。どのくらいのスペースが自分たちに必要なか分かっていたので、場所決めはすんなりいくかと思ったが難航した。

特に気を使ったところは、隣り合う他の作品との相性、壁の色、そして壁の素材だった。また、なるべく目立つ場所にとお互いの意識があったので、出来るだけ希望通りの場所に展示できるように伝えた。

(細川友萌)

ペアとなった高松さんの作品に電車の窓を写した写真がある。電車の窓から見える移ろう景色と、窓に映り込んだ車内の様子が重なり、変化する一瞬を写しつつある。この写真がきっかけとなり、暗い会場での展示プランが浮かんだ。作品が電車の窓と同じような役割となり、会場の様子や鑑賞者等が作品に映り込む状況を作る試みだ。人、場、物との出会いから制作過程、作品の着地点が変化する私たちの制作にもリンクするような感覚があった。

(阿部大介)

ドキュメントについて。企画側もドキュメントを作るということで、最初はファイリングされたポートフォリオのようなものをイメージしたが、この企画自体の進み方が流動的だったので、作り始めてすぐに、過程を整理してまとめること自体が難しいような気がしてきた。なので、私はGoogle ドライブのドキュメント上で、日記のようなメモのようなものを準備から会期が終わるまで常に更新していくかたちをとることにした。内容は、参考にした記事や文献などもメモしたが、企画側や学生とのやり取りから感じたささいなことや、自分なりに発見したこと、疑問、口に出すほどでもないもやもやなど、なるべく私的でとりとめないことばかりを意識して書いた。そうしてみると第三者がそこに書き込むことに抵抗があり、URLだけを参加者全員が見られるリンク先に置いておくという回りくどい方法でかたちばかりの共有をした。

「協働」をテーマにした企画のなかで、全員が「協働慣れ」しているわけではないし、全員にそれを求めてはそれは疑似体験に過ぎないので、という違和感があった。私の私的なドキュメントを見るには、もちろんURLをただクリックすれば簡単に見られるのだが、どれくらいの人が見たいと思って、そこまできたのかはわからない。私がえて面倒くさい方法で、自身を共有しようとしたのには、「協働」を考えるうえで、そういうアクセスのしにくさや、積極的には開かれてはいない状況も、ひとつのケースとして存在していても良いのでは、という意識があったからだろう。

(岸本紗和子)

ドキュメントは最終的にペアごとにA3のスペースに収まることを条件として展示されることになっていた。また、経過を共有する目的でクラウド上にフォルダを作成しており、アップロードされたドキュメントをお互い見ることができるシステムが採用されていたが、そもそもフォルダを利用している参加者は少なかった。その際の反省点をフィードバックし、この記録集作成では一つのテキストファイルをクラウド上で共有し、執筆者が他の文を見ながら編集できるシステムを試してみることにした。また、それぞれの記事にレスをつけることも可能としていたが、他人の文に干渉することは、なかなか難しかったようだと思う。そこには執筆者同士にかなりの信頼が要求されたのだろうと考える。

それぞれ文章の調整されていく過程を傍観していたが、互いに影響は起こっていたように感じる。記録集を編集するにあたり、この空間を2つの展覧会に続く3番目の場として考えるようにしていた。

(中山 開)



設営から展示について

ランダムで組まれた私たちのペアの共通点は、普段の制作活動が家族をテーマに制作することでした。対話を重ねる中で、同じテーマを持っていても、土台となる視点や制作工程の違いが面白く、制作のきっかけとしました。展示内容としては、お互いの家族の話から、自分の家族を取り材し考える工程を、写真とテキスト、資料の展示として発表しています。

(加藤千晶)

ペアの方と作品を制作するにあたって、お互いに自分の家族や思い出についてメモを取りながら質問を繰り返しました。家に帰るとアルバムや写真たての写真を元に家族に関する情報や感じたことをテキストに起こしていました。お互いの話を聞いているうちに全く異なる家庭のかたちが見え、作品になっていく実感が湧いてきました。

(永田琴巳)



やり取り・連絡・交渉

女子美に通っていた者としての視点を交えての考えですが、今回の展覧会の試みは、どことなく女子美全体にある、(もちろん、個人差はあります)個人主義で少し浮世離れした人たちがつくり出でぬるま湯に浸かっているかのような、妙な心地よさのある雰囲気に喝を入れるような問題提起だったのではないかでしょうか。学生は「共同」アトリエで制作し、行事や課題ごとに「協同」していますが、「作家」として「協働」できる関係性が築けているのでしょうか。

作家たちとの設営についてのやりとりは、スプレッドシートが連絡ツールとなりました。14組の作家に1件1件メールを返信する煩雑さが無いことや、自分たち以外のペアの情報を見ることができるため刺激になるのではないか、という考えがあり、採用された手段です。作家たちには事前に展示プランを提出してもらい、それを手元に会場を回って懸念事項がないか女子美側と確認し、現地調査を女子美側が書き込みました。それを確認した作家がラボ側へ質問を書き込み、こちらがその回答を書き込むという、掲示板のようなアナログ的なやりとりでした。作品の実物を見ていないためにイメージが掴めない所も多く、必要なものを新たに準備するなどして現場で調整していただきました。最終的に展示された作品は、お互いの過去に制作した作品を並べたもの、各自の新作を組み合わせて1つの作品のようにしたもの、現地で共同制作したものなど、様々なケースが見られました。そこに至るまでには、ペアの一方が率先したり、互いが協力したり、意見がぶつかるなど、ペアごとにその関係性が見られましたが、一般的な美術館ではできない展示方法に挑戦したり、急きょ当館の備品を利用して思いもよらなかった表現になったり、元マンションギャラリーである当館でしかできない展示となりました。

ペア間だけでなく、企画運営スタッフも含めた全関係者の間で「協働」の関係性が見られた本展で、皆があらゆること・人から相互参照し、互いを高め合っていったのなら幸いです。

(森崎由衣)

展覧会として一般的に大学が主催するグループ展とは違う印象を受け、奇妙な違和感が面白く感じました。それはおそらく、各々のペアが「協働」を模索した結果、保持する所と委ねる所の狭間が不安定な状態で在ったからではないかと思います。展示空間やドキュメントを思い返すと、「協働」することの本質は「受信」することなのかもしれませんと感じました。ペアとなった他者の思考や自分の新しい要素を受信し、素材や工程を受信し、空間を受信する、そのような事が極めて意識的に行われていたからです。

(鷹野 健)



関連イベント

参加作家によるギャラリー・トーク

参加作家が展示室で自身の作品について語ります。

日時：2017年11月18日㊁、26日㊂ 14:00-16:00



トーク・イベント

「関わりながらつくること」

参加作家の「記憶のはがし方プロジェクト」(阿部大介 / 鷹野 健)と、
加藤 慶 (アートラボはしもと学芸員) が「協働することの有効性」について話します。

日時：2017年11月18日㊁ 17:00-18:30

※ イベント終了後、会場内にてオープニングレセプション。



関連企画ワークショップ

ワークショップ概要

大沢公民館ワークショップ 「エピソードを辿る」

日時：2017年11月21日（日）

10:00-13:00

講師：加藤千晶・岸本紗和子

会場：アートラボはしもと

今回のワークショップは、大沢公民館の女性学級から依頼を受けて開催した。展覧会に出展をしている講師の加藤・永田のペアの作品テーマが「家族の思い出」であることから、同じように二人組のペアを組み、用意したワークシートと工作キットを使って、対話と色遊びによって自分にとっての「家」や「家族」について改めて考える時間にするという内容とした。キットは、家族の思い出についての質問に色で答えるというもので、実際の作業は色鉛筆などで色を塗るという簡単なものにした。

キットは二つ折りのカード状になっており、色をすべて塗りカードを開くと塗った色がカードの内側のデザインの一部になり、グリーティングカードができる仕掛けになっている。



ワークショップを通して cross reference のテーマである「協働」や「他者と関わる」ということに触ながら、アートに親しんでもらいたいという思いがあった。また、今回は「工作ワークショップをしたい」という要望であったが、キットに沿って手を動かすだけではなく、参加者同士が話し合う工程をいれたり、それぞれが考えたりできるよう工夫した。

参加者の女性学級の普段の活動が特にアートに特化したものではなかったため、アートへの関心が高くなないことや手を動かすことへの苦手意識がある可能性も考え、実際の作業がなるべく簡単なことであること、また取り組んだものが成果物として手元に残ることを重要視した。

実際に実施してみて、家族というテーマにしたことで当然、時代や個人個人の背景によって思った以上に様々な回答があった。中にはシリアルな回答などもあったが、それを自分で言葉にすることや、パートナーと思い出を共有することは、参加者にとって記憶を刺激することにもなり、予想以上に良い効果を生んだようだった。参加者同士のコミュニケーションも活発になり、楽しんで取り組んでいただけたように思う。

(岸本紗和子)

子ども向けワークシート

配布期間：2017年11月25日（土）、26日（日）

設置場所：会場入口、キッズ・アトリエ

対象：小学生・親子

内容：展示作品の中で気に入った作品を選んで模写をする。

自分で描いた模写に新しく作品タイトルをつける。





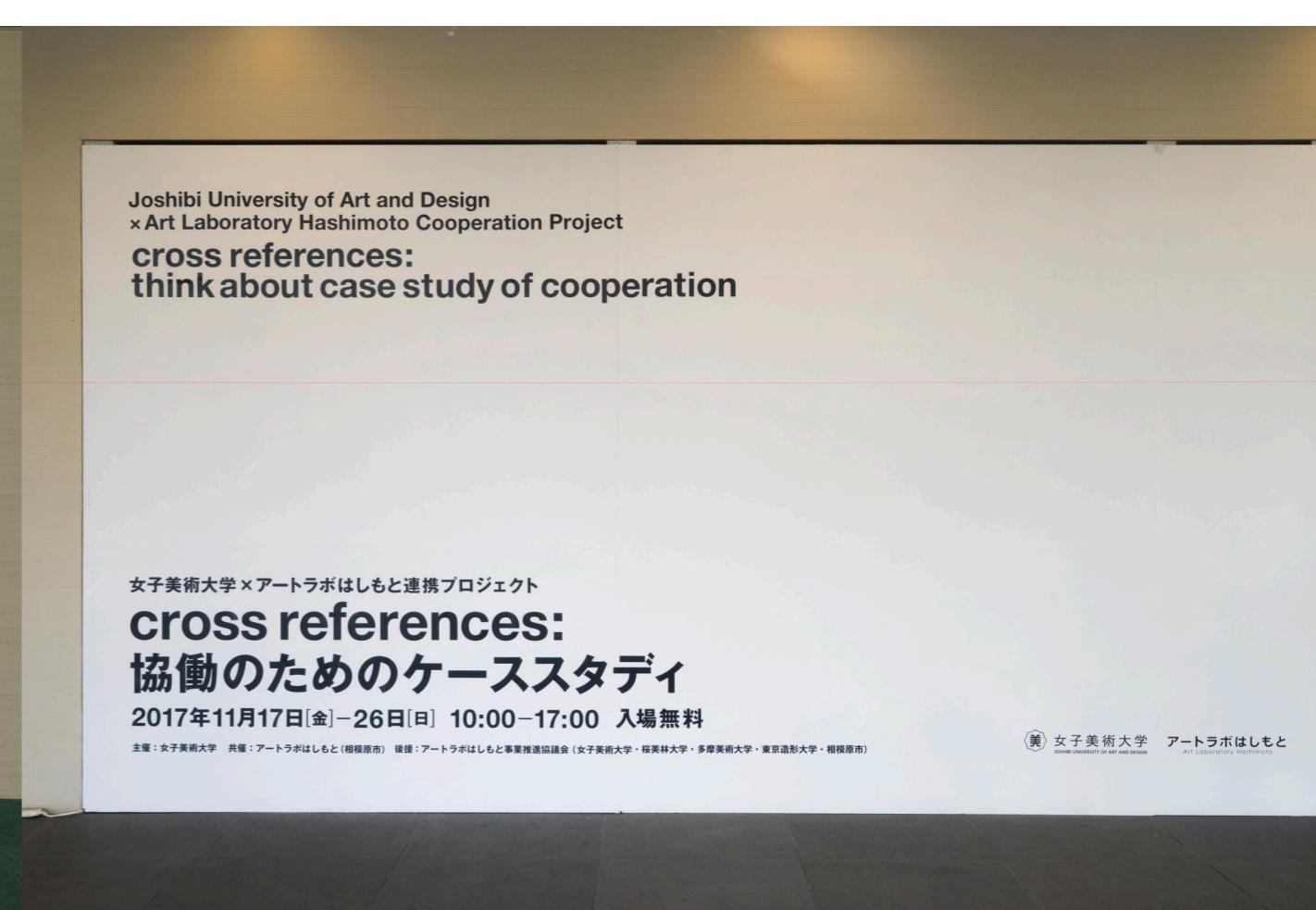
清川茉莉佳 [洋画専攻3年] × 栄 悠里 [洋画専攻3年]



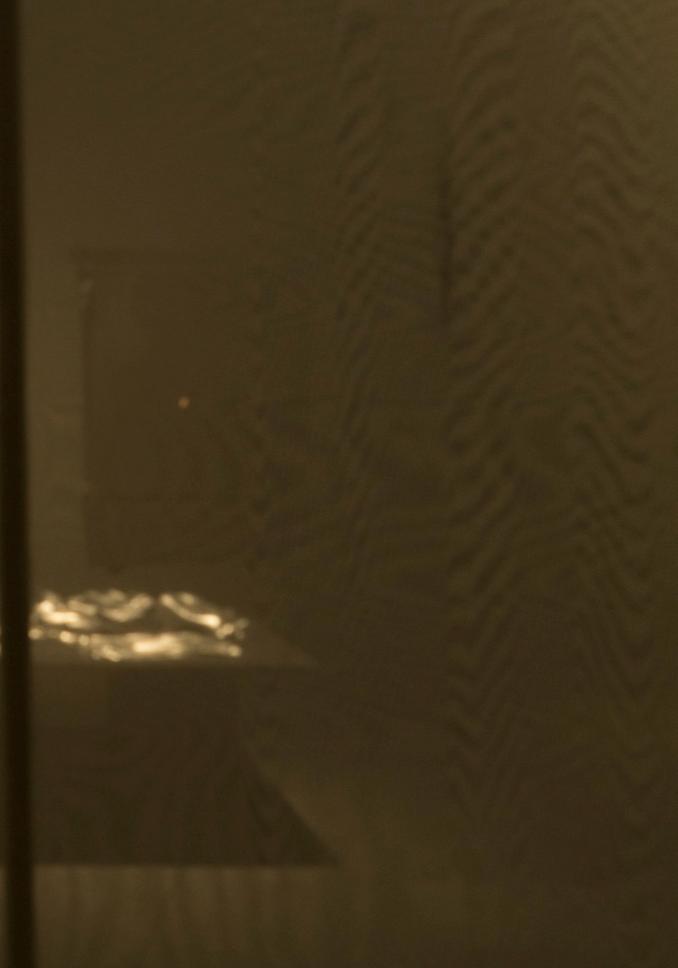
中条璃々子 [洋画専攻3年] × 吉田朋花 [博士前期課程洋画研究領域 修了生]



酒井紫帆 [洋画専攻3年] × 中山 開 [洋画専攻助手]







記憶のはがし方プロジェクト（阿部大介 [洋画専攻版画コース准教授]・鷹野 健 [アーティスト]）

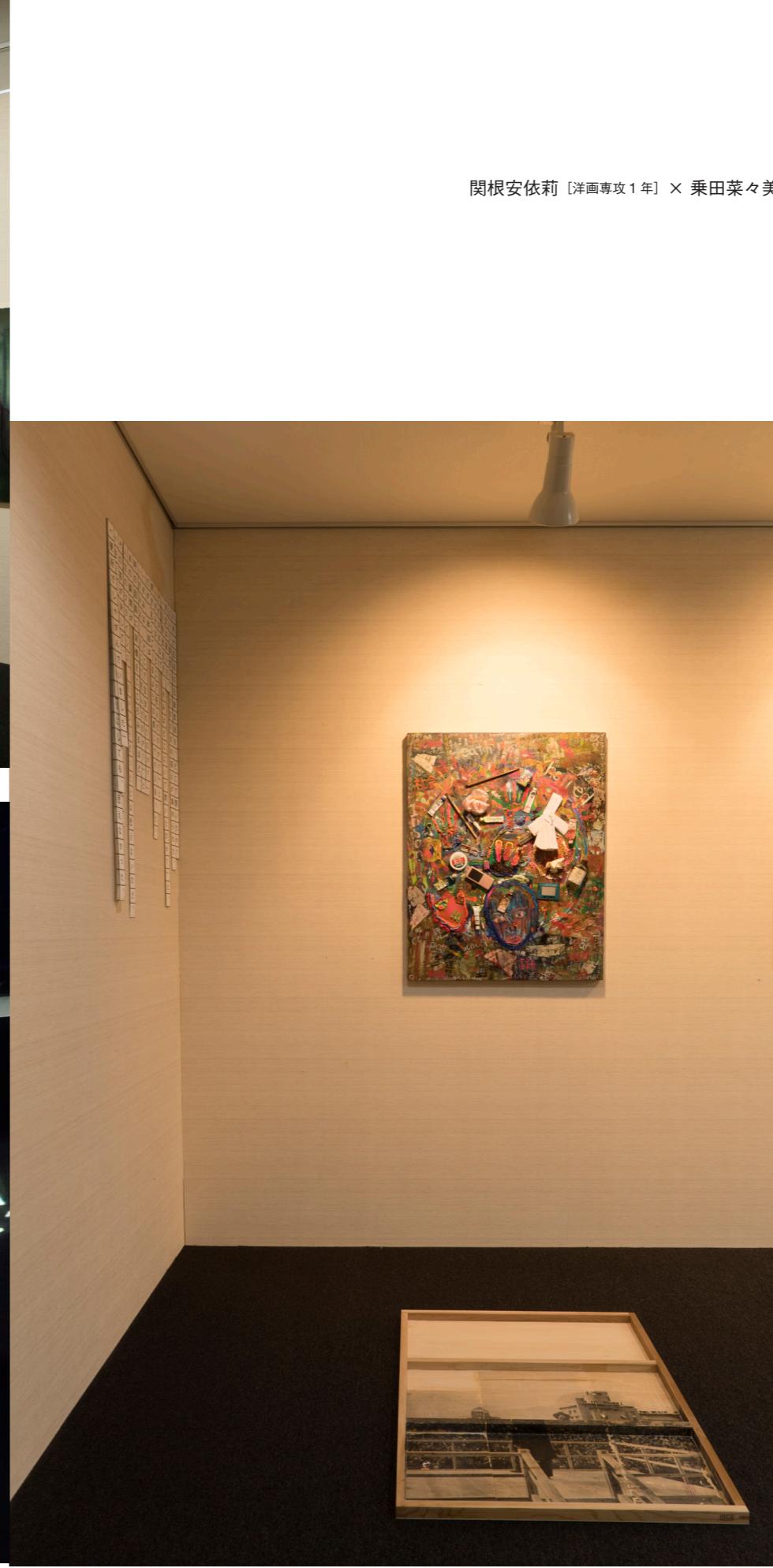
×

高松由佳利 [洋画専攻3年]

安齋 薫 [洋画専攻4年]

×

中村花絵 [洋画専攻版画コース助手]



反省会は結果的には開かれませんでした。もしかすると私が知らないだけで、オフィシャルなイベントではなくても、いくつか雑談の機会も含め、個別にいくつもの反省会は行われていたことだと思います。当時私は、初台にある某美術館でアシスタントとして働いていましたが、岸本さんとは何度か、初台にあるデニーズで会って、話をしながら企画を進めたり、事後にも反省会のようなものを2人で行いました。反省会は展覧会の最終日、撤出後に学生の方から出てきたアイデアで、それならば話し合いの材料になるような言葉を事前に集めようと、アンケートを企画者サイドで用意して答えてもらいました。学生に限らず参加した全ての人に、無記名のアンケート調査を行いました。いまもその内容は、関係者がアクセス可能なGoogleFormのリンク先に格納されています。そのアンケートを集計していく、とても嬉しく思った回答がありました。企画に対して否定的な意見を書いた彼女は「振り返り会をやる必要はない」とは言いながらも、企画の改善できる点、アートラボはしもとという施設で展示をすること、作品はどのように扱われるべきか、ドキュメントの性質の見せ方に対する不満等々、誰よりも雄弁に熱心に振り返っていたのです。こんなにも語るべきことがあったのだと驚いたとともに、それをもっと企画の中で発露する場を設けられなかった設計不足が悔やまれました。

(沼下桂子)

いつも制作のための取材はしていましたが、この展示では自分が取材しながら、ペアの作家に取材をされ続けるので、繰り返し考える時間を持てました。自分たちの内面や、取材する家族に起る変化を楽しむことも含めて作品になったような気がします。

(加藤千晶)

同じようなテーマで制作をしていても、土台になっているものは全く違いました。ペアの方との対話を元に少しずつ制作した過程がほとんどそのままの形で展示につながりました。写真とテキストというデリケートな物質を扱うのは不安でしたが、伝えたいことがよりストレートに伝わったのではないかと思います。今後の制作に大きく前向きになれた時間でした。

(永田琴巳)

ある目標へ到達するために必然的な手段であるはずの「協働」が、この企画ではあまりにも目的化されすぎていたのではないかと思います。ペアを割り当てられて共に作品と展示を考えるというプロセスには、企画者からの「協働することは良いことだ」という要請を感じます。昨今の一般社会においても様々な現場で使われている言葉だからこそ、ある種の話法に回収されてしまってはいけないです。アカデミックな現場でのケーススタディであるのならば、ことさら重要なのはその経験を踏まえた次のアクションや、その先の新しい価値の創出ではないでしょうか。

(鷹野 健)

cross references



self-re-location

問題の引き継ぎについて

2つの企画はまったく関連性がないようにも思えるが、そのどちらの背景にも共通して「他者と関わる」というテーマが継続して存在していた。

ある種の乱暴さを持って決められたペアとのぎこちない関係性を出発点として、なんらかの手段によってそこに存在しあうこと、鑑賞者という未知の存在に不在の作品について言葉で伝えようすることは、だれも単独では存在できない、ということを確認するための作業だったよう思う。

実験的な取り組みである今回の2つのプロジェクトから、参加者それぞれが「協働」や「他者と関わる」ことについて考えるきっかけとなればと思う。

(岸本紗和子)

■ 2018年2月8日(木)

はじまりは洋画研究室にて、ざっくばらんな話から。

[備忘録]

- ・大学生は自宅と大学間の往来のみで地域とふれあう機会が少ない。
土地への愛着や地元感が希薄であり、地域性を実体験から打ち出せない。
- ・展覧会をする機会が減り、作品を移送・設営する経験が少ない。
事実、車を運転できる学生が減っている。移送手段に制約がかかるることは、表現方法にも影響があるのではないかと推測。
学生に展示の経験値を増やしたい。
- ・ラボで事業を実施する場合、大学との距離がネックとなる。
連携先の大学から最も遠いのが女子美術大学。移動時間が生じることで校外活動には限度がある。

そしたら、作品を担いでラボまで歩くのはどうだろう…。

前回のフィードバックや現在のそれぞれの状況を整理した課題を、そのままテーマに据え置いて立案したのが「self-re-location」のはじまりだと思います。作品を担いで移動することは実現できませんでしたが、会場を2会場にしたり、校内で描いた風景画、あるいはサイトスペシ

フィックをテーマにした課題作品を当館に持ちこむなど、位置をずらすことを試みました。結論からいえば、展覧会としては説明が難しく、全てが成功したは言えないかもしれません。が、企画する関係者のモチベーションは前回よりも高いと感じます。個人的にも、次の展開を想起させる色々な発見がありました。大学、大学生、当館との関係を多少は表面化できたことは、大学との協働プログラムの面からすると意義があり、この蓄積が今後の展開に向けて重要なものと考えます。

(加藤 慶)

self-re-location

1つの景色を、2つの場所で

大森 悟

self-re-location セルフリロケーションには、「リロケーション」と「ロケーション」という2つの言葉が重ねられています。「リロケーション」には「移転」、「引越し」、「再配置」の意味があり、さらに「ロケーション」には「位置」、「場所」などの意味も含まれています。学生自らが作品の「展示工程」と「移動」などを通して、作品と会場の関係性、移動手段や交通インフラなど、女子美術大学とアートラボはしもとの2ヶ所の点と点を繋ぐように視野を広げることで地域環境の特徴などを実践的に学び考察するプロジェクトです。

この展覧会は、昨年開催した「cross references: 協働のためのケーススタディ」展を継続するかたちで女子美術大学の教員や学芸員・関係者、並びにアートラボはしもとからなるプロジェクトチームの共催によって企画されました。

女子美術大学の洋画専攻1年次の最初の授業課題[校内およびグランドの取材から]、3年次の授業課題であるグループワーク[ワーク・イン・プログレス]で制作した課題作品などを、女子美術大学1011スタジオとアートラボはしもとの2会場で順次展示と公開を行います。

2つ目の会場となるアートラボはしもとでは、まず女子美会場での展示を元に、出品予定作品を説明したテキストの掲示と展示予想図となるマスキングテープによるマーキングを行い、作品自体が存在しない状態から展覧会がスタートします。そして会期後半には作品の「再設置」や「再展示」を行い、実物の作品の鑑賞をしていただくことになります。

ここではイメージと現実の往来が引き起こす「ずれ」や「矛盾」といった断裂されたかのような余白や不足箇所をより積極的に補うことで、潜在的な作品の可能性を探し出すことを目指します。このような補い合う鑑賞方法や関係は、協働のよななかたちとしても新たな展開を生み出すかもしれません。しかし一方では、作者にとっても、鑑賞者にとっても、不自然さや齟齬を抱えての美術体験のスタートになるでしょう。

多くの情報に覆われ、予定調和で、想定内のことの上書きが続くように物事、そして日々の時間が進んでしまうような高密度空間に暮らしている今日、私たちはその不足箇所にどのように向き合うのでしょうか、その余白にたゆたうときに何を得ることができるのでしょうか。

self-re-location セルフリロケーションを行うことは、多様性のある未来予想図と現実を手にするための小さな旅です。

どうぞごゆっくりご高覧下さい

岸本紗和子

本展覧会の大きな特徴は、作品を移動させるという通常は公開しない過程をあえて視覚的に示すため、会場に作品自体が不在の時間があること、そしてその不在を補うため、作家が自らの作品について言葉で伝えることを試みるという点にあります。

アーティストとして作品を作る時、例外はあるとしても、その延長線上にはほとんどの場合、作品を「見せる」という行為があります。自分の作品をどんな環境で、どんな方法で見せるのか。「作る」行為に満足せずに、その先にある「見せる」ところにまで意識を向けるということがアーティストには求められているのです。それは自分以外の他者の存在を意識し、未知の存在である他者に自分を伝えるということでもあります。

今回の試みは、まさにそのアーティストに課されている「伝える」という課題への取り組みのひとつです。

他者に何かを、今回の場合は自分の作品を言葉で伝えるとき、どんなに手を尽くしても、言葉と実際の作品の間で受け手にずれが発生することや、作者の意図しない伝わり方をすることも当然あるはずです。しかし、作品を「見せる」とき、そこに作者以外の解釈が加わることは避けられないことでもあります。

特にこの会場に不在の作品について知るには、想像力や知識、個人的な経験に基づく推察など、見る者の何らかの介入が不可欠です。ここに展示される（予定の）ものに限らず、作品は作りだす者以外の他者、見る者がいて初めて成り立つのです。むしろ、他者が関わったときに発生するそのズレをどう受けとめるか。アーティストに求められている課題の真意はそこにあるのかもしれません。

今回の展覧会は、前述の通り、アーティストの課題に対するひとつの試みです。

しかし、それと同時に作品を見ることの延長線上に「作る」という行為を存在させるという、鑑賞者に対しての試みもあります。

展覧会を通して、鑑賞者とともに「作る」と「見る・見せる」ことをより近くにある存在として考え、本展がその間を誰もが自由に行き来するためのひとつのあり方を示す場となることを期待しています。

開催概要

女子美術大学 × アートラボはしもと連携プロジェクト

self-re-location 1つの景色を、2つの場所で

1

女子美術大学 10号館 1階 1011スタジオ
神奈川県相模原市南区麻溝台 1900

2018年6月12日火曜日、13日水曜日

11:00-16:30 ※入場無料
[両日全作品公開]

2

アートラボはしもと
神奈川県相模原市緑区大山町 1-43

2018年6月17日日曜日 - 7月1日日曜日

10:00-17:00 ※水曜休館 入場無料
[全作品公開: 6月24日日曜日 - 7月1日日曜日]

関連イベント: 参加学生によるギャラリー・トーク(全2回)

会場: アートラボはしもと

■ 第1回

日時: 6月17日日曜日 14:00-15:30

作品がまだ展示されていない状態の展示室にて、学生が展示予定の作品解説をします。

※終了後オープニングセッションを予定しています。

■ 第2回

日時: 6月24日日曜日 14:00-15:30

作品が全て移動・再設置された、作品のある展示室で再び学生が作品解説をします。

主催:

女子美術大学

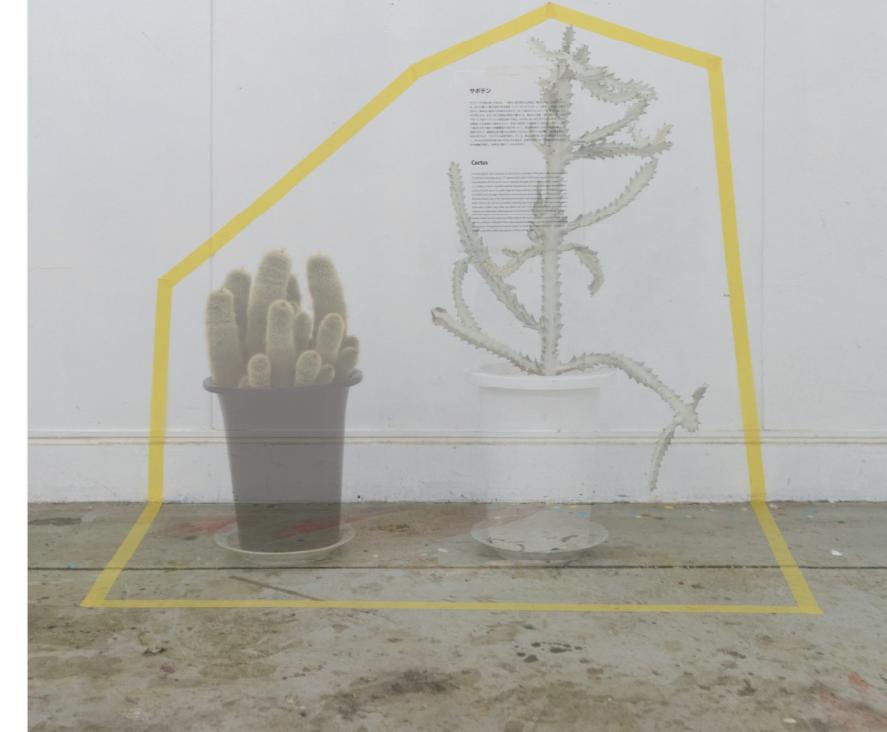
共催:

アートラボはしもと(相模原市)

後援:

アートラボはしもと事業推進協議会

(女子美術大学・桜美林大学・多摩美術大学・東京造形大学・相模原市)



女子美術大学 × アートラボはしもと連携プロジェクト
self-re-location 1つの景色を、2つの場所で

本展では、作品そのものはもちろん、作品が別の会場で再び設置していくプロセスも公開します。展示空間における作品の「設置・移動・再設置」について、一緒に考えてみませんか？

2018年6月12日[火]、13日[水]
11:00-16:30 (両日全作品公開)
会場1: 女子美術大学 10号館1階 1011スタジオ | 観覧料: 無料
神奈川県相模原市南区麻溝台 1900

2018年6月17日[日]-7月1日[日]
10:00-17:00 (全作品公開: 6月24日[日]-7月1日[日])
会場2: アートラボはしもと | 水曜休館 | 観覧料: 無料
神奈川県相模原市緑区大山町 1-43

関連イベント
参加学生によるギャラリー・トーク(全2回) 会場: アートラボはしもと
第1回: 6月17日(日) 14:00-15:30 作品がまだ展示されていない状態の展示室にて、学生が展示予定の作品解説をします。
終了後オープニングセッションを予定しています。
第2回: 6月24日(日) 14:00-15:30 作品が全て移動・再設置された、作品のある展示室で再び学生が作品解説をします。

主催: 女子美術大学
会場: アートラボはしもと(相模原市)
後援: アートラボはしもと事業推進協議会(女子美術大学・桜美林大学・多摩美術大学・東京造形大学・相模原市)| 聞き合せ: 女子美術大学洋画研究室(担当: 中山) 042-778-6111 (女子美術大学代表) | フートラボはしもと: 042-703-4654

デザイン: 中山 開

授業内容

※ self-re-location は洋画専攻カリキュラムへの参加者を中心に行う想定で作られたプログラムでした。

1年生カリキュラム

校内およびグランドの取材から
女子美の校内、およびグランドの敷地内に
イーゼル、キャンバス、画材を運んで風景作品の制作を行う。
デッサン制作の期間を授業1週目に設ける。
以降、油彩画(支持体実習で作製した30号)を制作する。

3年生カリキュラム

ワーク・イン・プログレス(グループワーク)

制作過程を公開しながら表現を構築していくことで、より多様性のある作品を生み出す方法論を探求して行く。更にここではグループディスカッションを通して表現のテーマや表現方法を決定し、共同制作で作品を完成させる。

作品タイトル

1年生

竹内佐江	「生命」
佐久間友里奈	「女子美の図書館」
佐藤優菜	「ギオンスタジアム」
三井朝希	「校内風景」
渡邊真弥	「初夏の木漏れ日」
富山明香里	「校内風景」
高橋侑希	「喫煙空間」
仙波美咲	「ならぶ」
虎田悠莉	「青のファンタジー」

3年生

B グループ	D グループ
「hacolony」	「相模原 サガミハラ Sagamihara」
及川恵里奈	姫野華子
大原世津子	池田朱里
川上日向子	伊藤朋子
木塚はな	上江洲明花
田中万優子	梶並千夏
チョウ ウシ	菅ヶ谷実穂
西尾 陽	片山喜栄子
藤井笙子	日塔唯華
山本日向子	村野万奈
馬 索菲	徳江益美
	カン ミンハ
	石 柳
	クノードゥルストーファー・シリビア
	佐々木帆南

カリキュラム外出品
短期大学部美術コース1年生

中田成美 「静物画 瓶とビー玉」

キャプ・テキ ワークショップ



- 企画者（女子美）
- 企画者（アートラボ）
- 出品作家

当館では施設の特徴や当館の事業目標を参加者に伝えるために、連携先と協力して、事前説明会にワークショップを実施することがあります。今回は、女子美ミュージアムの学芸員の岸本さんと協力してもらい狙いを3つにしぼって計画しました。

- ・参加者がグループワークに対して積極的な参加を促し、コンセプトの共有を図る。
- ・部屋の特徴を体感することで、普段の設置のイメージを払拭する。
- ・場所や作品、他者との関係への気づきを与える。

企画コンセプトにあわせて、「キャプ・テキ WS」と名付けました。キャブは「キャブション、キャブチャー」テキは「テキスト、適応、テキパキ」の意味が含まれています。

参加者はグループに分かれて部屋ごとにある指示書（女子美のコレクションや浮世絵などの名画をマスキングテープのみを使用して会場で再現して、最後にプレゼンテーション）に従いながら進めます。制作中は会話を禁止するなど、行動を制限することによって、グループワークや空間の利用法について感覚的に理解するプログラムを組みました。

参加者、先生の声を聞く限り、プログラムの満足度は高かったようです。あくまでアイスブレイクであり、ワークショップの効果が実証されたわけではないのですが、その後の展覧会では、学生自身の作品を示すマスキングテープの貼り方に工夫や意図を感じられました。このワークショップは、学生が自由な発想で本プログラムに取り組む動機付けになったのではないかでしょうか。

（加藤 慶）

一般的な「キャブション」の役割を理解するとともに、自分の作品について言葉にすることに挑戦してもらった。作品を言葉で表す作業を通じて、自分の制作について改めて考るだけでなく、作品を見る人の立場に意識が向くよう注意した。基本的には、文章として不自然でないか、伝えたい内容がわかりやすくまとまっているかといった点を主に指導した。

キャブションと作品を照らし合わせ、本人がどんなことを伝えたいのかを汲み取りながら、作品と文章のそれぞれの良い点を生かせるように心がけた。

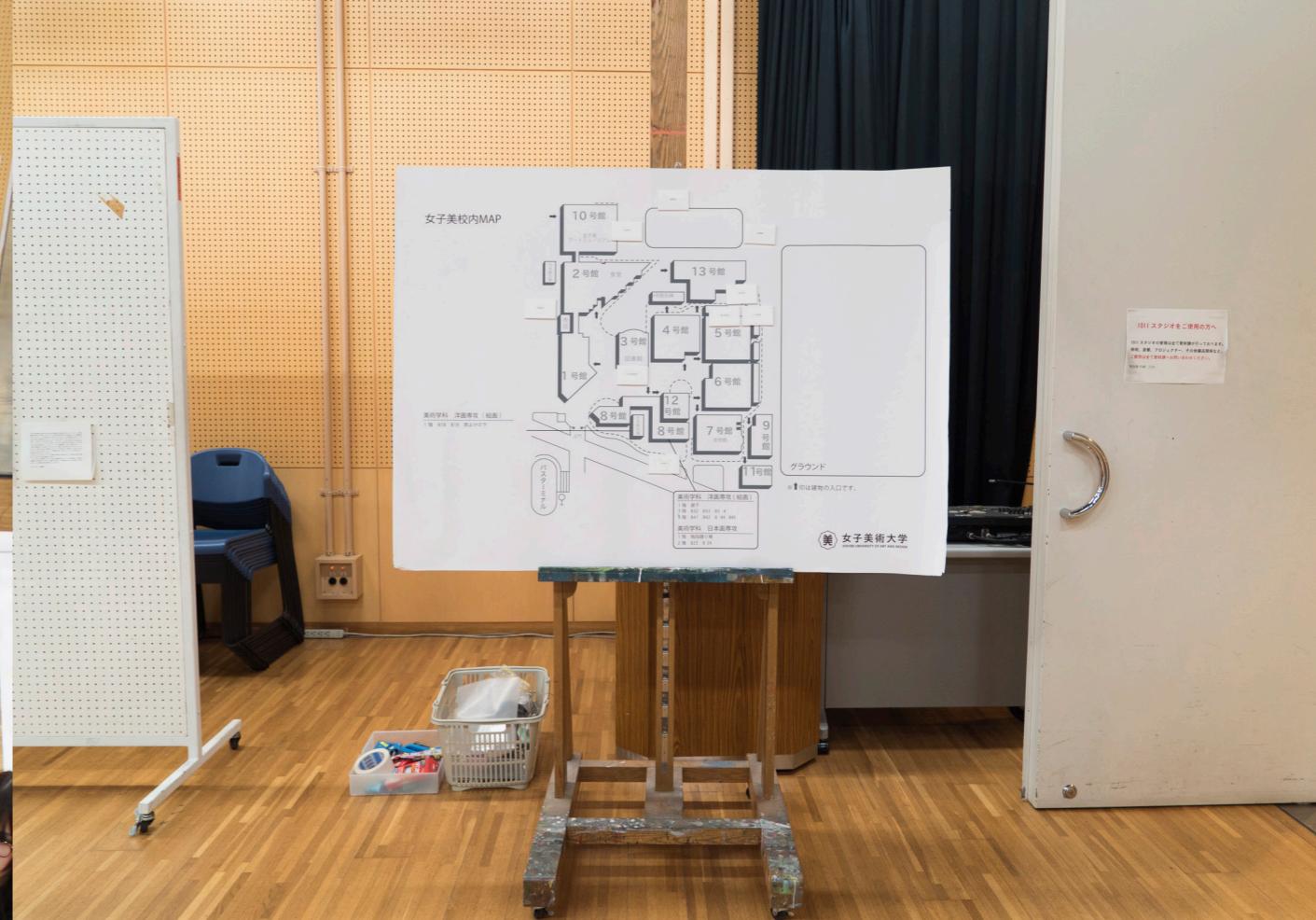
（岸本紗和子）

今回の展覧会では、テキストとマーキング展示室も一般に公開したため、その空間にあるテキストの意味や、テキストで鑑賞者に何を伝えたいのかなど、自分の考えを整理する必要があった。展示経験の少ない1年生にはなかなか難しい課題であったように思う。

エントリー時に提出されたテキストは、内容がまとまっていたり、一文が長かったりと、やはりテキスト作成に不慣れな印象を受けた。しかし6月1日(金)に当館で行われた「キャブ・テキWS」に参加した学生たちの反応を見て、次に提出されるテキストがどのように変化するか、テキスト添削日が楽しみになった。

当日会場でそれぞれのテキストを見てみると、描かれている場所に対する思いや印象、画面に盛り込んだ要素、仕掛けなどについて書かれており、各々自分の伝えたい内容がしっかりと自分のなかで固まったようであった。そして、読み手を意識した文章構成に変わっていたのに驚いた。最初の文章は、極端にいうと一方的なアピールポイントの列挙であったが、「これはぜひ伝えたい」という内容を選び、どのように表現するかまで考えられた文章になっていた。改行や行間、用紙の大きさにも様々な工夫や考えがみられたので、そうした個性を消してしまわないよう、添削は基本的な誤字脱字の指摘や、文章の組み換えなどのアドバイスにとどめた。

（堀越詩李子）



1回目展示 @女子美

地図を展示するアイデア

今回の展示では、1年生は大学校内で風景画を制作するという課題作品を展示した。参加者で話し合い、女子美を訪れたことがない人にも作品が描かれた場所をイメージしやすいように、キャンバス地図を展示室中央に設置することになった。地図上のマスコットと作品横にある写真がそれぞれ対応しており、その絵が描かれた場所がわかるようになっている。女子美会場での展示でも作家の名前が貼付けられた地図を使っていたが、アートラボではさらに、それぞれが持参したマスコットを使い、その向きによって描いた方向もわかるようにという工夫が追加された。

(岸本紗和子)

この地図を置くというアイデアは、女子美での最初の展示の時に生まれたものでした。女子美を知らない人がこの風景画を見ても、どこで描かれたかということはリアルには伝わらないではと思い、その女子美での風景課題だということをよりわかりやすく伝えるために地図がいいのではないかと考え、方角を合わせるなど工夫して配置したものでした。

(三井朝希)

今回の展示は、私が初めて自主的に参加した展示でした。

それまであまり関わって来なかった同期の仲間たちと、意見を交互しながら展示内容を決めていくのはとても新鮮で、そして楽しかったです。

みんなキャンバス内で描いた風景画の展示だったので、構内のマップを作ろう！という案が出たのには笑いました。自分たちの化身であるフィギュア？をそれぞれ持ってきて、マップに飾り付けをする、女子美らしいと言うのは可笑なことです、発想が可愛くて私は好きでした。

またみんなで展示したいです。

(竹内佐江)

移動について

私は今まで自分の作品を展示することもなく、どの工程も今回が初めての状態でした。私は今回、電車で作品の移動を自分で行いましたが、これ以上でかい作品になるとまた別の方法を考えたりする必要があると思います。これから展示では、作品のキャプション等だけではなく移動等の要素も必要な事として考えていきたいです。

良い経験になりました。

(三井朝希)





当初の計画としては、個人・チームごとに作品を展示する部屋や位置を自由に決めていき、複数人が同じ場所を希望したり、互いの作品が干渉したりする場合は、当人同士で話し合う、というのが当館でのマーキングの内容だった。指定した範囲内であれば、床でも天井でもどこでも良いとしていたので、個人制作の1年生のマーキングはきっと奇想天外なものになるだろうと思っていた。

しかしマーキング初日、来館した1年生は皆迷うことなく大ギャラリーに向かい、あっさりと自分の作品の展示場所を決めてしまった。話を聞いてみると、1年生同士で話し合い、一つの展示空間をつくることに決めたのだという。アートにも女子美術大学にも馴染みのないアートラボはしもとの来館者に対して、自分たちの風景画をどのように鑑賞してもらいたいか。マーキングの段階で、会場と対象、なにより「展示」という行為をかなり意識して取り組んでいたのが印象的だった。1年生も3年生も、しっかり作品の展示構成を考えながら作業にあたっていたため、こちらは設営方法に関する助言や道具の貸し出しの指導をした程度だった。

唯一問題があったとすれば、やはり当館との情報共有だろう。来館スケジュールや指示書の用意など、メールやドライブ上ではうまくやり取りできず、来館した学生に直接情報共有を呼びかけることが度々あった。次回開催に向けて、女子美術大学・参加学生・アートラボはしもとの間の情報共有システム見直しの必要性を感じている。

(堀越蒔李子)



補足的にレスします。当館と他の大学連携事業においても、学生と教員との情報共有については毎度考えなければなりません。「cross references」ではスプレッドシート上のやりとりが機能していたのに比べ、上手いくかなかったのは事実です。それは学年の違いだけでなく、残念ながら各々学生のモチベーションや責任感の差もあったのではないかでしょうか。「cross references」では、課題以外の作品を展示することが可能でしたが、「self-re-location」は開催時期の関係上、授業課題作品の出品となりました。この差で見ると、「課題作品以外の作品を学外で発表できる」ことは、学生にとって大きな原動力となり得るのかもしれません。また、準備期間がより長かったことや展覧会のシステムのためか、「cross references」の方が一人ひとり「参加作家全員で展覧会をつくり上げる」意識があったように思います。

情報共有の方法だけでなく、参加する学生たちをどう盛り上げていくのかの工夫も考える必要があると思います。

(森崎由衣)

助手という学生と近い距離で接するポジションということから、企画運営に関わりつつも直接的な連絡係のようなものを役割として心得ていた。今回、プログラムが固まる前に展覧会が進行し始める程のギリギリのスケジュールかつ、参加者には複雑な行程を理解してもらわなければならなく、連絡、伝達方法には非常に悩まされることになった。効率を優先し、グーグルドライブなどのウェブサービスを前回の展覧会同様に使用し、言葉をベースにした連絡を行った。情けない話だが、それでも進行を管理しきれず私が混乱を起こしていた際、同僚の助手のスタッフが学生との間にもう一つの連絡の階層(物理的な招集や直接的な対話)として入ってくれ素早く進行を調整してくれた。前回の入れ子状の展示システムとなにかの符合を感じた。

プログラムの中でフォーカスされていた言葉のツールとしての有用性と限界についての視点を図らずも進行の場面でも意識させられることになった。

展覧会として経過をどれだけの来場者が目にできたのかはわからないが、展示されていた最終的な出力以上にテープ貼りの作業など様々な場面、場所でそれぞれの過程に継続的な熱量をもった対話や調整を見ることができた。それらは参加者から起きた企画提案などの動きにも繋がっていったのではないかと思う。

或いはもしかしたら、前回と比較して、進行の不備から起きた情報の不足やある種の無政府感が結果としてより直接的な対話を促す要因となっていたのかもしれないなどとも考えてみる。

(中山 開)



女子美術大学 × アートラボはしもと連携プロジェクト
セルフリロケーション
「self-re-location」ワークシート

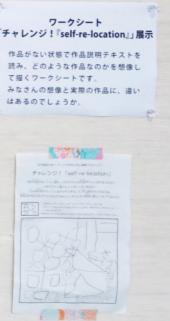
まだ作品がないてんじ室に、これからどんな作品がてんじされるのかな?
いまのてんじ室にヒントがいっぱいあるよ!
どんな作品がやってくるのかそうぞうして、下に絵をかいてみてね。
作品は6月24日(日)からみられるよ。じっさいにみて自分の絵とくらべてみよう!

作品ばんごう

- かきおわったら、「ワークシート回収 BOX」にいれね。
- このシートはみんなのぶんをまとめてかべにはるよ。作品がてんじされたら、もういっかいみきてね!

※ほかのひとにみられるのがいやだな、とおもったらこのシートをもってかえってね。

かいてみよう!



三井さんからの提案：ワークシート

今回の展示は、展示場所が変わるということや、作品を設置をする過程を含めて見せることで、作者としても見に来る方としても珍しい形でした。ワークシートは、どうやらこの展示を見に来て下さる方により親しみやすくできるかということを考えた時に出てきたアイデアでした。

このワークシートは、仮設置の段階から完成の絵を想像させるような内容で、これを見て見る側の人も作り手と同じように、作品に1つの形として参加するようなワークシートができたと思います。

(三井朝希)

作品の無いギャラリートーク



「いま、作品が見えました。」

学生の作品解説を受けて、まだ一度も実物を見ていない進行役が発したこの一言で会場のボルテージが一気に高まった。

どこかおぼつかない雰囲気が漂うなか、トークがはじまりました。作品が設置されていない会場で、作品について語るイベントには、語り手の学生も、一般的なギャラリー・トークのような、作品を前にした説明を想像していた来場者も戸惑ったかもしれません。事実、当会場に訪れた来場者は、はじめは怪訝そうに覗いていました。

改めて、会場に作品がない状態で、作者が作品や展示方法について語る今回のトークイベントは、とてもチャレンジングな企画であったと思います。ですが、近い将来、講評会などで作品について語る機会が待ち受けている学生たちにとって、貴重な機会となったのではないでしょうか。

トークイベントは、作品以上に作家が雄弁に語りすぎてしまい、トークが蛇足になってしまったり、会場の雰囲気によってクオリティが大きく左右されたりするので、運営側にとっても正解のないイベントです。今回のように、作者と運営側のみならず、オーディエンスを含めた全員のアドリブが試された状況を経験したことは、これから当館におけるイベント作りでもおおいに参考になりました。

はじめは躊躇いがちに様子を伺っていた来場者も、謎の一体感に感化されたのか、徐々に一人ひとりが想像力を働かせながら楽しんでいるようだったのが印象的で、会場にある種のカタルシスがもたらされた場面は、「協働」によって創り上げいく本事業を象徴するものだったのでないかと思います。

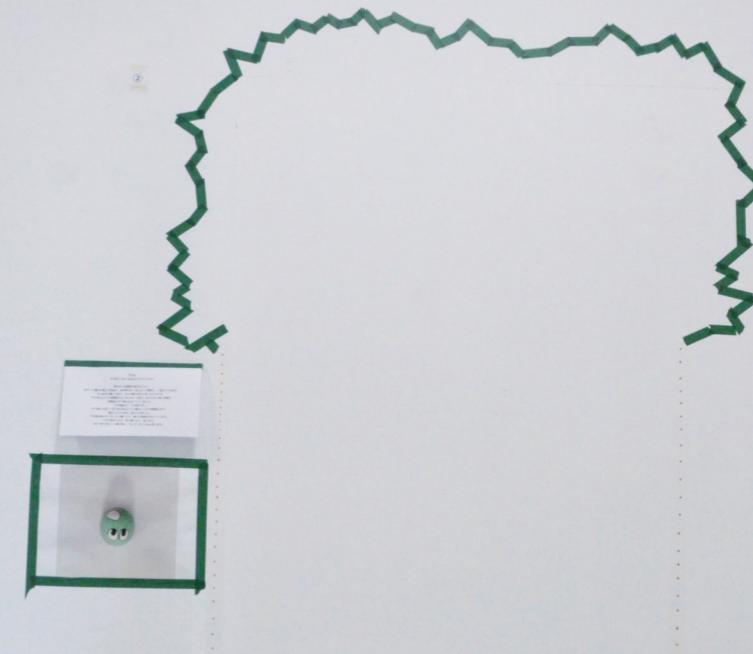
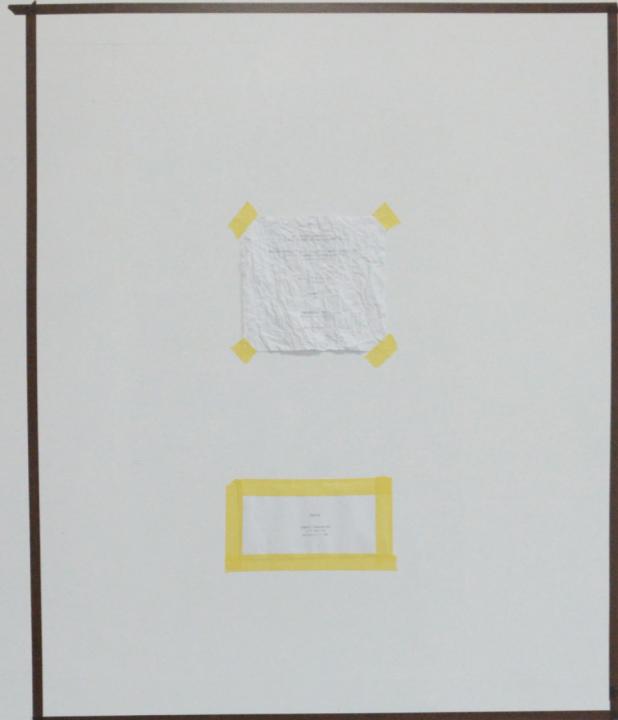
(加藤 慶)

作品のない展覧会でのギャラリートーク。まるでイヴ・クラインが何も展示しなかった「空虚」展のようである。実際には作品がこれから運び込まれる前に、作品の位置を「仮決め」するマスキングテープだけが貼られた状態でのトークなのだが、作品がないのでは話が進まない、というよりも、その不在性に向かって出品者が饒舌になるという奇妙な逆転現象が起きていた。それはもしかしたら「作品を見ればわかる」と高を括ってしまう作家がしばしば行う「無言」の裏返しとして、作家は本来、皆饒舌なのだということが露わになった瞬間だったかもしれません。奇妙であったのはそれだけでなく、私たちはトークの間中、色・形・素材の異なる、しかし作品と何らかの関係を持った、個性溢れるマスキングテープに向き合っていた。おそらくそれは、展覧会の鑑賞者に向けられたものである前に、作家の自作に対する親密な関係そのものであったのだろう。そうした思い思いのマスキングテープを見つめながら、饒舌に話を進める学生たちとトークしていると、まるで未だ見ていない作品が見えてくるような錯覚に陥った。それは自らが／自らを移動させる展覧会「self-re-location」の間隙に起きた奇妙な現象ではあるが、しかし同時に私たちがあらゆる作品を見ることに「期待」している、という事実を、言葉を交わしながら再確認するものともなったのである。

(中尾拓哉)









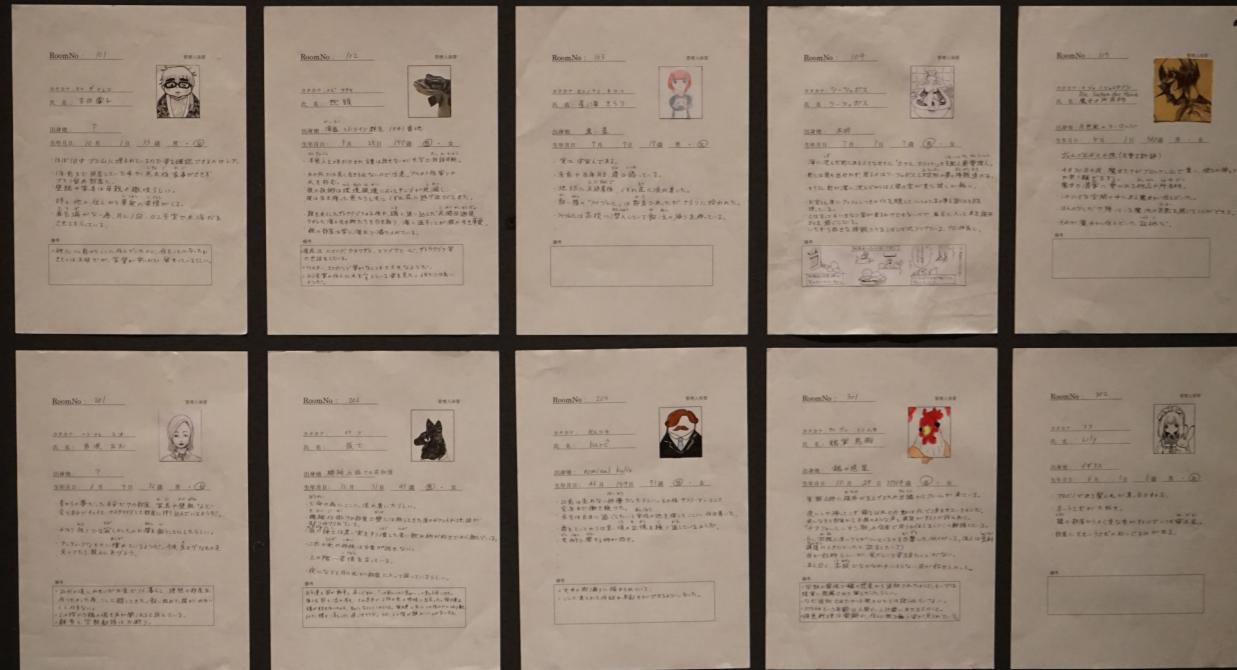
◎ 1
◎ 1



女子美術大学 × アートラボはしもと連携プロジェクト
self-re-location 1つの景色を、2つの場所で



hacolony
くずれ荘住民リスト





1回目のトーク直前、作品がないのに何を話せばよいのか、と学生たちは不安そうにしていましたが、いざ始まると作者としての思いが次々と口から出てきて、まるで作品が見えてくるかのようだった。

トークをしたことで、学生たちは自身の作品を展示・公開することに自信をつけたように見えた。しかしマーキング期間が終わり、作品を展示し始めると「実際の作品を見てがっかりされないだろうか」という新たな不安をこぼし始めた。久しぶりに自分の作品を見て、先週話したような作品として鑑賞者の目に映るだろうか、と急に不安になったのである。

作品のイメージと実物が異なるのは当たり前であり、言葉で伝えたイメージは単語一つ一つに対する個々の人間の概念によってまた変化する。不安に感じる必要はない。先週自分が描いていた作品のイメージと、今日の前にある作品がどのように違っているか、自分の中で整理して次のトークで言語化してほしい。学生たちにはそう話し、当日も自分の言葉で話せていた。

トークを2回行ったことで、展示空間と作品との関係を考えることはもちろん、作者である学生たちが自身の作品と改めて向き合う良い機会になったようだ。不安もあっただろうが、2回とも自身の気づきを余すところなく話してくれたと思う。

(堀越蒔李子)

人前で自分の作品について話すということは、私にとって講評でしかやったことのない事で、今回のイベントで初めてお客様の前で話すということをしました。

普段から美術に触れる機会が少ない人には、特によりわかりやすい説明が必要だと感じ、焦らず伝えることを優先しました。そのためか、自分で思ったよりもトークがよくできたと思っています。

(三井朝希)

初めてこのような企画に参加したので、分からぬことが多い、色々と揉めたり、悩んだりと思っていたよりも大変な部分もありました。でも自分達でどうしたらこの展示が良くなるのか、見る人が面白く感じるのかと、展示を見る側のお客さんの立場になって考え、協力し合う事ができたと思います。多くの先生方と交流するきっかけにもなり、この企画を通して、展示を行う大変さ、楽しさ、やりがいを知る良い経験になりました。ありがとうございました。

(富山明香里)

【編集後記】

記録集の作成を行うことが決まり、打ち合わせの際ラボの加藤さんから出た、展覧会の各タイミングでそれぞれの立ち位置でのコメントを載せるのはどうだろうというアイデアを軸に構成を考えいくことになりました。関係者それぞれに文を依頼する際、こちらからの指示は最小限に抑えた為、どのようなものが出でくるかわかりませんでした。次々書かれていく文や、集まつてくる資料に目を通していくと、反省会のフォームでの意見についての文。企画者からの協働せよとの要請を感じるという文。挨拶文の、作品は誰かに見せる必要があるという文。その他、異なる立ち位置の関係に関わる視点がいくつか書かれていきました。私はこの企画の中で、企画運営や出品者、編集者とポジションを転々としながらも、常に目で追っていたのは異なる思惑の中間に現れているだろうもやのような展示の核の姿だった気がしています。

考えてみれば、その視点は誰かとなにかを行うということそのものなのかもしれないし、それを一人称の目線に置き換えて言えば、想定できないなものかと自分の中間にフォーカスを絞るということだったのかもしれません。(これは岸本さんの挨拶文、鷹野さんのコメントの別の捉え方のかもしれません。)編集作業で2つの企画を振り返りながら、先ず指定されていたであろう学校とラボの中間へのフォーカスから、今後、学校 / ラボと、さらにその外側の世界との中間にそのフォーカスが移行していくことができたらという期待を込め、これを結びとさせていただければと思います。

紙面の関係上、また卒業等連絡の難しさなどから全ての参加者に文の依頼をできなかったことをお詫びいたします。また、この記録集の編集にご協力いただきました関係者の皆様にこの場を借りてお礼申しあげます。

中山 開

女子美術大学 アートラボはしもと 連携プログラム

cross references : 協働のためのケーススタディ
self-re-location 1つの景色を、2つの場所で

発行日：2019年3月

編集：
中山 開

デザイン：
乗田菜々美

執筆：
【女子美術大学】
沼下桂子 岸本紗和子 中山開 阿部大介 細川友萌 加藤千晶
永田琴巳 三井朝希 竹内佐江 富山明香里

【アートラボはしもと】
森崎由衣 加藤慶 堀越蒔李子 中尾拓哉

鷹野 健

協力：
【アートラボはしもと】
加藤慶 森崎由衣 堀越蒔李子

沼下桂子 岸本紗和子

印刷：プリントパック
発行：女子美術大学洋画研究室
著作権者の許可なしに、本書の無断転載、複製、再配布を禁じます。